

投稿
「この命、義に捧ぐ」
門田隆将

一九四五年八月十五日、根本博陸軍中将は、北支那方面軍司令官として終戦を迎えた。
根本は軍司令官からの武装解除命令を拒否してソ連軍相手に徹底抗戦を続けながら、四万人の邦人を撤退させた。一方、満州方面軍司令官は武装解除に応じ、民間人を見捨てたために、ソ連軍による虐殺、レイプ、略奪等多くの悲劇が生まれ、それは残留孤児の問題をはじめ、現在も深い傷となって残ってしまった。

内蒙古脱出
「責任は私ひとりにある。全軍は命に代えても邦人を守りぬけ。」根本の絶対命令によってソ連軍の装甲部隊との熾烈な白兵戦に突入した。重要ルートとして最後まで残されていた張北と張家口を結ぶ橋梁を爆破した。その際の激しい銃撃戦で両軍とも多数の死傷者が続出した。なんとかソ連軍の攻撃を凌いだ。八月二十日まで日本人居留民全員が張家口駅に集められ、貨物用の無蓋車に次々と乗せられ、天津まで運ばれた。
張家口の町からは二万人の日本

人が消えた。部隊に撤退命令が下りた。ソ連軍との激戦から北京までの撤退で本部隊との交信もままならず、北京へと辿り着いた時は極限状態であった。

しかしこの奇跡ともいえる撤退成功には国府軍と蒋介石の武装解除延期という暗黙の了解があった。根本はその恩義を忘れなかった。

ここまでの内容は、サブタイトルである「台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡」への伏線なのだ。

金門島決戦

終戦から四年後の、一九四九年六月、九州延岡から小さな漁船が夜陰にまぎれて出港した。船には元北支那方面軍司令官、根本博が乗っていた。この時、蒋介石率いる中国国民党と毛沢東率いる中国共産党との「国共内戦」がまさに決戦を迎えようとしていた。共産軍の攻撃により大陸から撤退し、いよいよ台湾まで追い込まれた蒋介石を助けるため、死を決意した渡台であった。

蒋介石と会談が実現、「林保源」という中国名で決戦地、金門島に赴く。金門島は台湾海峡西百五十キロ海上にある。東西二十キロ、南北十六キロで中国本土から十キロも離れていない小島である。
同年十月二十四日、共産軍はついに金門島に上陸、攻撃を開始した。

上陸した兵士の数は約二万人、うち死者は一万四千人、捕虜は六千人、国府軍の死者は千二百六十九人、負傷者は千九百八十二人。戦闘は三日間で終了した。まさに国共内戦が始まって以来、国府軍初の完勝であった。以後、共産軍は同島および台湾の攻撃を断念した。

消された歴史

この作戦を立案、指揮をとったのは軍事顧問、林保源こと根本博であった。根本の活躍は日本にも台湾にも不都合とみえて、この事実は台湾でも長い間、伏せられていた。それがようやく解禁になったのは昨年（二〇〇九）のことだという。

未発表の本人の手記を見つけたノンフィクション作家が綿密な取材で、よくここまで再現したと驚いた。「義」を貫いた日本人の感動実話である。

『この命、義に捧ぐ』
台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』

集英社二〇一〇年四月発行
(にゃんぱば)

情報紙に対するご意見やご感想、または投稿などを事務局までお寄せください。
事務局 蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一二十七
(三七三二)四七八五

事務局よりお詫びと訂正

本紙第三十七号の特集「女塚貝塚」の本文および参考資料に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

二ページの一段目女塚貝塚の十三行目の「芹澤長介は中学生の時（一九一三）とあるのは、（一九三七）の誤りでした。また、三ページの最下段の参考資料のうち、「呑川の歴史」大田区教育委員会発行とあるのは、「呑川は流れる・二〇〇四」呑川の会発行の誤りでした。

読者の皆様からのご指摘と、ご注意をいただきました。ありがとうございます。また、関係機関の方々には、ご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

これからは今以上に注意を払い、よりよい情報紙を作ってまいりますので、引き続きご愛読ください。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,959人
	女	27,290人
	計	57,249人
世帯	31,147世帯	

平成22年11月1日現在

平成22年12月1日発行

かまはし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

第38号



わがまちの顔 茶室の障子ばり 山田 英一さん

このたび「茶室の障子ばり」を卒業された山田英一さんの随筆集と故人の人となりをご紹介します。

山田英一さんは平成二十一年九十八歳で天寿をまっとうされました。山田英一さんは明治四十二年三月静岡岡部郡智都森町に生まれ、大正十二年四月浜松市の表具店に入門、昭和九年六月西蒲田六丁目秀英堂山田表具店を創業し現在に至る。又平成三年二月には東京都伝統工芸士に認定される。

戦前お隣には、郷土の名士小澤昭一氏が写真屋のご子息として相生小学校を出ておられ、蒲田に来られた時には、懐かしいと度々立ち寄られたそうです。

さて、表題の「茶室の障子ばり」は、四半世紀にわたる東京表具師内装文化協会の機関紙「表装文化」に寄稿されていたものを一冊にまとめたものである。

この一冊は三つの章から成っていて、「随想篇」では職人としての立場で考えて機会ごとに述べられている。次に「紀行篇」は連合会の全国大会などに出席された折の親善旅行や、ご自身の旅を通して自然

と人との出会いを筆にまとめられている。最後の「美術篇」は日本画に一言を持つ山田さんらしい審美感に溢れている。

随想篇より「茶室の障子ばり」
東京でも数少ない日本庭園の八芳園は、芝白金台にある。

その昔大久保彦左衛門の下屋敷で、武家屋敷を思わす立派な門構えは当時の歴史を語り、一万五千余坪の自然の中に老松が樹齢をほし、数々の灯籠や古井戸にも深い由緒が偲ばれる。鴨の浮かぶ池の周辺に数十株の紅葉が赤く燃え、自然の織りなす景観は素晴らしい。

池を見下す小高い一隅に優雅な茶室があり、今日はその茶室の障子ばりである。師走と思えぬおだやかな小春日和、木漏れ日のさんさんとした陽差しを浴びて障子はがしてある。よく刈り込んだツツジの老株の上にはがした障子を干し上げる。ここは目黒の自然教育園に近いせいか、野鳥やカラスが頭上でひっきりなしに鳴きつづけ、都心と思えぬ別天地である。

昨夜久しぶりに障子紙を継ぎ、今日は全部継ぎ目入りであるから

中々捗らない。この頃の障子ばりは大体ロールの一枚ばりであるから、今日の若いものによい勉強である。はとバス観光コースの外人達が物珍しげに立ちどまる。

折しも、庭つづきに住む、かつての所有者で、財界の大物久原房之助氏の末亡人が散歩に見え、往時のお話をいろいろ伺うことが出来た。

この茶室は麴町のさる邸から移されたもので、中国の先覚者、孫文がこの邸内に匿ったとか、この白金の屋敷の他に、須磨に六万坪の邸宅があった等、庶民の我々と程遠い話にびっくりした。九十歳をとうに過ぎたなお衰えを見せぬ老婦人があれこれと語り、時のたつのを忘れて楽しかった。今日は障子ばりの他に茶室の襖も十二、三本はりかえた。夕立の椽で引手は赤銅の手打、心のこもった変り玉子の上物で、上張りは鳥の子紙の無地ばりである。

すべての仕事をはり終り、充ち足りた気分でした。一服のお茶の味は格別であった。(五十四・十二・十五)

まだご紹介したい作品が多数ありますが、紙面の関係で一部しか紹介できないのが残念です。

山田英一さんは、蒲田西口町会の第一地区長を永年勤め上げられました。

(取材 勝俣、石渡、柳通委員)

小学生ドッジボールチームの活躍

蒲田西地区の小学生ドッジボールチームのうち、三チームが、去る八月二十二日に行われた全国大会に、揃って出場という快挙を成し遂げました。

都内の小学生のドッジボールチームは約五十あり、その中で道塚ドリムウイングスが都大会の男女混合の部で優勝、相生ガッキーズが二位、女塚ゴッチャンアテナが女子の部で優勝と、それぞれ素晴らしい成績で、全国大会に駒を進めました。全国大会では、道塚は本意な結果でしたが、相生、女塚ともにベスト8という活躍ぶりでした。

この大会の競技種目は男女混合の部のみでしたが、今年女子の部が新設されました。女子の部で活躍した女塚ゴッチャンアテナは、普段は女塚ゴッチャンファイターズという男女混合のチームで活動しています。今回の大会出場のため、道塚ドリムウイングスや相生ガッキーズなど他チームの女子部員との混合チームを結成し出場しました。

〈道塚ドリムウイングス〉

代表（指導者） 安孫子清二
創立 平成八年

部員数 三十四名

練習場所 道塚小学校体育館
練習 毎週土日九時から十二時
隔週水金の夕方（自主練習）

平成十六年にも全国大会に出場



練習場所 おなづか小学校体育館
練習 毎週土、日曜日



そして、子どもたちを見守るお母さんと一緒に、小さな子どもさんまで大きな声援を送っている様子に、親子一体の「絆」の団結が大きな力の原動力となっていると感じました。そんなお母さん、お父さんたちがいて、明るい未来への希望に見えるようでした。

西澤代表談 今のレギュラー選手は、ジュニアのときからがんばっている子どもたちが中心となり、夢でもある全国大会出場を果たし、ベスト8という素晴らしい結果を残すことができました。

週二回の短い練習時間でありながら、「全員ドッジ」を合言葉に、それぞれ集中して子どもたちの個性を引き出す練習を心がけています。

いつも一緒に練習してきて、都大会当日、病気で休んでしまった子の分まで頑張るようにとの思いをこめて、コーチが子どもたちの手に「絆」という文字を書き、その思いが伝わりました。

一緒に楽しくドッジボールをする仲間を募集中です。

〈女塚ゴッチャンアテナ〉

監督 栗原清隆
創立 平成十七年
部員数 三十名

九月十一日（土）の体育館、代表の安孫子さんはじめこのチームのOBである同氏の長男、次男や他のOB・OGの指導のもと、会場をいっぱいを使い、各レベルに分けてチーム編成し、それぞれ試合形式での練習は本番さながら、全員のきびきびした動きや真剣な態度など、充実した訓練を続けている結果が好成績につながったのだと実感しました。

我孫子代表談 今のレギュラー選手は一年生のときからのメンバー、全国大会では決勝トーナメントへの進出はならなかったが、この大会に出場できたことは、子どもたちにとつて大変よい思い出、記念になりました。緊張と不安の連続だったが、子どもたちの将来に大きな自信と勇気を与えてくれたことと思います。チームの子どもたちとコーチ一同は、この貴重な体験を活かし、春の全国大会に向けて練習を開始したいと思います。

校長先生は、保護者の方が撮影した都大会のDVDを見ましたが、統率のとれた素早い動きは躍動感に溢れ、非常に感動いたしました。ただ、残念なことに全国大会では少しあがってしまった、十分に力を出し切れなかったようで、そのリベンジの意味でも、春の大会に向けてより一層練習に励んでいるようですと語

初めはボールを投げるのができなかつた女子でも、練習を続けることで強いボールを投げられるようになり、試合時間は五分、スリルがあつて目が離せない展開は本当に楽しいスポーツです。

女塚はOBがたくさん練習を手伝いに来てくれていいと他チームからも言われる。小学校時代、スポーツをしておくことで、それを通じて親子の親睦、他の大人とのふれあいなど社会の輪が広がっていくのを実感します。

校長先生は九月の学校便りでチームおよびチームを支えてくれたコーチ、保護者に感謝を述べるとともに、一生懸命努力すればできるのだということも教えてくれたと、全校の子どもたちに熱いメッセージを送っています。

取材をして感じたことは、監督、コーチ、保護者はじめ関係者皆さんの子どもたちを見守る大きな愛情でした。子どもたちが心身ともに健全に成長していくために、できる限りの応援をしようという思いがいっぱいでした。

ドッジボールというスポーツを通して、ルールやマナーを習得し、また、日々一緒に励むことにより仲間との連携、信頼感を深めていくこ

つてくださいました。

〈相生ガッキーズ〉

代表（指導者） 西澤貞則
創立 平成四年

部員数 二十一名

練習場所 相生小学校体育館
練習 毎週木、土曜日

十七年間で全国大会への出場五回、今回は七年ぶりの出場



日曜日の練習を見学、その子どもたちもボールに向き合い戦う姿は真剣そのもの、見る側に迫力が伝わってきました。

とになるでしょう。子どもの頃に何か打ち込めるもの、得意なものを習得することは、自分に大きな自信を与えてくれるものです。まさに教育の重要な一端を担っていると考えられます。

よいチームは決して偶然できるわけではなく、なんといいっても指導者の長年にわたる情熱や、保護者の強いサポートがあつての成果であり、それが伝統の力となっていくのだと確信しました。

とかく、暗い話題の多い中、子どもたちがはつらつとして輝いている笑顔は、地域に明るさや元気を与えてくれます。どうかこれからも練習を重ね、いっそうの成果をあげてください。

※参考までにドッジボールについて簡単に説明します。（辞書による）

ドッジとはラグビーなどで、素早く身をかわして進むこと。ドッジボールは漢字では避球。コート内で二組に分かれて球を投げあい、相手選手により多く球をぶつけた方が勝ちとなる球技。

（取材）
道塚 鎌田・幅委員
相生 伊藤・稲岡委員
女塚 石渡・瀬川・六車委員